

いざみ

札幌彫刻美術館友の会会報

第9号

平成十六年十月一日

題字：国松明日香氏

本郷新彫刻シリーズ 9



緑の輪

1974年(s49)苫小牧市は人間環境都市を宣言、そのシンボル像の制作を本郷新に依頼した。市役所と駅前そして苫小牧を取り巻くように苫小牧に出入りする道路沿い3ヶ所の計5基が設置されている。

一市民として

西村一夫

札幌はいまや世界の大都市の一つです。しかし「芸術の都」と、まだ胸を張れないのが残念です。彫刻や立体作品が好きな私ですが、札幌彫刻美術館には昭和56年の開館以来、数えるほどしか訪れておりません。

今までに荻原守衛、朝倉文夫、佐藤忠良や、パリのロダンとブルデルの彫刻美術館に行ったりことがあります。その作品の量と質に、また館のスケールにも圧倒されました。比較しても始まりませんが、小さくても札幌の彫刻美術館として、名実ともその存在を主張して欲しい。道外や海外から知人が来た時に、歴史が浅く名所旧跡の少ない札幌で、ぜひにと案内できる所になって欲しい。

どんなに市民がいても、美術に興味があり、更に彫刻が好きとなると、かなり少ないかもしれません。しかしこの人たちは、良い作品を見ると必ず、その魅力を多くの人々に伝えてくれるものです。彫刻ファンのみならず、一度見た人が又ぜひ来たくなるには、何か強力な引力が必要です。本郷新だけでいい人は別として、一般には多くのいろんな作品を見たいものです。

芸術の森美術館との関係や予算のことは分りませんが、国内外の彫刻美術館との交換展をやって欲しい。以前札幌彫刻美術館で見たヴィーゲラン展は、小品ながらとても印象に残っています。本郷新に強く影響を与えたと思われる、版画家で彫刻家のケーテ・コル

ヴィツもぜひ紹介して欲しい。欧米のみならず、世界のいろんな地域に、時代を越えた素晴らしい彫刻作品がいっぱいあります。また一つのテーマで、世界中から作品を集めなどして、札幌では見られないものも見せて欲しいものです。

ところで日本の美術館の入場料は高い。外国は安く無料の日まであります。美術館は利益を上げるよりも、一人でも多くの人に作品からのメッセージと感動を伝える場です。それは市民の心が豊かになることです。

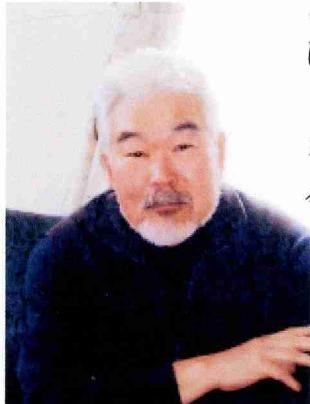
とにかく様々な世代の市民が、気軽に何度も行きたくなるような所であって欲しいと思います。

最近考えていること

山田吉泰

彫刻を始めた学生の頃、室町時代の能楽師・世阿彌の芸術論を読んだ。詳しいことは覚えていないが、能楽者を育てるのに年齢を区切ってそれぞれどんなことをすれば良いかという一節があった。

それが制作活動をしている中でいつも気になっているのである。例えば能を学び始める幼年期、無理強いして嫌われれば取り返しがつかない。楽しい遊びの中で能に親しませる。好きになれば厳しい修練がどんなに辛くても一途に学んでいくものだという。又ある程度修練を積んだ20歳代、心身ともに若さにあふれ、その動きが未熟なものであっても、はつらつとした若さという特権はそれを補ってしまう。生々とした感性は多くの欠点など問題にせず逆に美しく輝いて観る人を魅了して喝采を浴びる。誰にもまねのできない魅力なのだ。しかし悲しいかなこれは決して本物ではない。



いまだ本当の苦悩を知らず、ついつい俺はひょっとしたら師を越えたかと勘違いし、天狗になり、謙虚さが失われ、勉強もおろそかになる。そしてあの美しく輝いていた若さが去った時この人は終わる。

これは能楽の話であるが妙に彫刻の世界にもあてはまり、気になる一節である。あれほど輝いていた人が今はもういない。

老成といわれる者にはこういっている。もうあの若い感性は望むべくもない。にも拘らず、若い気を出して新しい形等を求めるにそれはただみっともないだけだという。これからは今まで積上げてきたものをより深く掘り下げ、さりげなく、気張らずに表現することある。

表現者の命である柔軟な感性はいつ朽ちるのであろう。この事がいつも心に残る。今まで自分の形を固めてしまうのではなく、感性の赴くままに色々なフォルムを求めてきた。その時のためである。その時はじっくりかまえて、これらの中のものを深く深く掘下げて、気張らずさりげなくひっそりと造ろうと思う。今度は自分の形をはっきり確立するために。

(彫刻家、札幌彫刻美術館専門委員)

頁	目次
1	本郷新彫刻シリーズ9 緑の環像 仲野三郎
1	巻頭言 一市民として 西村一夫
2	最近考えていること 山田吉泰
3	イラン並木は札幌の並木より尊い 小林令明
4	短歌 劉連仁生還碑に寄せて 濱 久子
5	親しめる文化財 浪岡豊明
6	最近の作品制作の心境・近況 伴 翼
6	渡辺行夫先生のアトリエ訪問雑感 森 茂樹
7	生涯学習と博物館ボランティアⅢ 高橋淑子
8	野外彫刻とアート ツーリズム 大内 東
10	ギャラリーシリーズ 6 ギャラリーどらーる 原 典夫
10	抜海の目 「知恵と汗と心」
11	札幌彫刻美術館後期行事日程
12	友の会だより

イラン並木は札幌の並木より尊い

小林令明

イランは（昔はペルシャと言われていた）日本の4.5倍の面積を擁し、カスピ海側は米の穫れる湿潤の地であるが、国のおおたは、北のアルボルス山脈と、西側のザクロス山脈に挟まれたキャヴィール砂漠とルート砂漠に占められている乾燥の地です。砂漠と言うより土漠と言った方が合っている土が乾燥した状態の国土です。私が持参した簡易湿度計によると、イランの数カ所の地でおおよそ湿度25%でした。ホテルにおいて夜洗濯をして、手絞りで風呂場に干しておくと、朝までには乾いている状況です。

イランの首都テヘラン（人口700万人とも1200万人とも言われている）イスファハン（人口127万人）の平均年間降雨量は200mmですから、自然降雨だけで、テヘランやイスファハンの豊かな街路樹は育ちません（東京の平均年間降雨量は1500mm）。60年～70年間失敗することなく、たえず定期的に水を与えた結果です。清生と伸びたポプラの街路樹はギラつく太陽をさえぎり日陰を与えます。周りが灼熱の土漠地ですから緑をたたえた街路樹の日陰はまさに天国のようなオアシスです。

乾燥の地イランにおいて、この天国を表す構図といえば、水が湧き流れていて、緑豊かな、花咲き乱れる楽園なのでした。イランの人々は、古来天国なる地を作ろうと懸命なる努力を傾けて、シラーズ、イスファハン、テヘランといった現在のイランを代表する町を造ってきました。有名なペルシャ絨毯も絵柄は、この天国を表しています。もともと古くは遊牧民としてのイラン人にとって、土漠のテント生活に色彩豊かな楽園を表す絨毯を敷くことによって、自分達の周りを華やいだ天国に変える住空間装置なのでした。現在のイランでは遊牧民はきわめて少なく、定住都市生活者になっ

た一般家庭にも、大量の絨毯が使用されているとのことです。

イスファハンは1597年にサファヴィー朝の首都として、125年間都市建設に精力を傾けた近世的都市でした（17世紀人口70万人）。イマームモスク、アリー・カープー宮殿、チェヘル・ソートン宮殿はイスラム建築の華に例えてよい可憐さに満ちた傑作で、世界遺産として今日見ることができます。しかし1722年にアフガン人の侵入により滅ぼされ、その後首都はテヘランに移り、再び首都になることはありませんでした。これが幸いして、多くの道路は現在でも当時の道路幅のまま市街道路として残っています。イスファハンのチャハル・バーグ大通りは「4つの庭園通り」と訳せます。庭園そのものはデザインが変わってしまって現存していないのですが、庭園の思想は道路造りに生きていると思います。全幅員80mもの大通りは、左右両側から、歩道、街路樹帯、2車線道路、街路樹帯とそれぞれ中央にせまり、中央は自転車道路とゆったりした歩道にベンチと樹木あるいは花植物が植えられ



ています。これはさきの天国思想により造られていると確信しています。もちろん電信柱はなく、電線のジャングルが視界を妨げることはありません。この300年前に骨



格を築かれた大通りには、昔は馬車が走り現在は自動車が走っているのですが、300年後の現在でも通用していることが日本の状況と照らし合わせると不思議です。

日本の街路樹造りには、天国の楽園を創る意識や理想の思いがあるのでしょうか。地下道工事に支障があれば、もったいないとは思うのでしょうが、やっと豊に育った札幌駅前通りの並木も切ってしまう運命だそうです。水に恵まれた札幌では、景観上の一つの装置としか見ない傾向があると言えます。並木は切っても植えれば、20年もすればほっておいても育つだけのものでしょうか。

風格という価値をどう計量すればいいのだろう。人々の思いにより、深く手のかかったイランの街路樹は、誇りとなって、尊く美しく見えます。

(環境彫刻*北星学園大学短期大学部教授)

(昨年秋の友の会による石狩バスツアーで訪れた故丸山隆先生設計の『劉連仁生還記念碑』を前にして)
短歌：④

劉連仁生還碑に寄せて

濱 久子 会員

畠中に黒御影石の生還碑

おとな独りが潜む形に

身を隠す大きさの穴に割り抜きて

その中の丸きは枕ならむか

生還碑に賛同せしは千人余

当別の畠中に二年前建つ

兎狩りの袴田氏見つけぬ洞穴に

潜める男劉連仁を

救出は昭和三十三年炭鉱より

脱走つづけし十三年間

中国の家族に逢はむとひたすらに

逃げ延び籠る十三年を

炭鉱より脱走せしは五人とぞ

行方知らずも劉氏のみにて

木の根かじり木の実を溜めて籠りしか

熊の如くに冬眠できず

碑の制作依頼を受けし「丸山隆」

癌病み半ばにて弟子等に持みき

病床の師に指示を受け「加藤宏子」

碑の前に語れり淡々と

碑の完成見届けぬま

劉連仁・丸山隆共に逝きたり

碑の後へに植ゑし桜は花咲きて

散りかかるらむ今年の春は

劉連仁知りたる去年より関連の

訴訟記事載るを切り抜く

親しめる文化財（石狩の浜を訪れて）

浪岡 豊明 会員

バスが石狩砂丘に近づくと気持がさわだつてくる。「石狩」の像はことしどんなだろうかと思うからである。像は変るはずもないのに、毎年のようにここに来て感興が湧くのは、こちらの心境が少しづつうごいでいるからなのであろう。

仰臥の像は頭も胸も布を巻いている、つまり上半身はすべて覆われて顔の表情は見えない、わずかに腹部のふくらみが表現されているだけだ。「無辜の民」一連15体の作品は、本郷新の代表作に数えられている。中東紛争の渦中に巻き込まれ、悲惨な状況の中に呻吟する罪のない人々を単純化した手法で表現したもので、その中の（虜われた人I）が「石狩」の原型をなすものではないかと思っている。これは石狩開拓期の女性像であるかも知れない、そのテーマは（嵐の中の母子像）の子を負う母と同じであるかもしれない。張り出している両下肢と何かをつかもうとする手の動きには布の下の苦悶の表情が暗示されているように思う。

今年は友人達と共に参加させて頂いた。いずれも高齢者の生きがいを自ら生み出そうとする仲間たちであるが、一同「石狩」の像と森川さんの懇切な解説に深く感動していた。

本郷新は海が好きであった事が、この地石狩を選んだひとつの理由とも伝えられている。

だが開拓農民のことを思うとき、石狩川は作品の大きな背景となつたはずである。北海道を豊かにした母なる川は、今もなお遠い上流から砂粒を押し運んできて、この砂丘に堆積している、砂丘は河口に沿つて成長しているようで、なぜか灯台も低く見えてきてしまう。

本郷新が無辜の民の像を石狩に建てるにふさわしいと考えたとすれば、この川がしばしば洪水をもたらし、長く流域の農民を

苦しめたことも無縁ではないような気がする。

地表にはりついて咲くハマナスに芯のつよさを見るのも爽やかであるが、もはや「石狩」の像を除いて石狩砂丘を語ることは出来ない。

札幌は明治政府の作った町という生い立ちのためか、市民の心を伝える事蹟や、市民生活の歴史を残す建造物もなく、いわゆる「文化的公共財」に乏しいようだ。先人の営みを伝えるものが残されていないのはさびしい、その意味からすると彫刻美術館は札幌に生まれ育った本郷新の芸術とその生活思想を根拠としている、貴重な作品群から本郷新の心を知ることが出来るのは有難い。友の会は札幌の民情を支える有力な文化団体の道を歩んでいる、かけがえのない存在であると思う。

藤女子大の藪禎子先生が、島崎藤村の記念祭のときに、長野県馬籠村で行った講演の一部を転記してみよう。

<私の住んでおります北海道も確かに自然に恵まれておりますが、これはいわば原始の自然なのです。こちらへ参りますとそれが人間の営みや歴史と重なつて見えてくるのです。それが魅力です。その複眼を提供してくれるのが「夜明け前」なのです。偉大な文学、優れた作品というのは、私たちの日常的な感覚や思念を洗い、新しい断面を切り開いてくれるものですが、「夜明け前」が私の場合、若い頃から変わらずその役を果たしてくれています>

含蓄のある話である。ここで言う「夜明け前」を「無辜の民」におきかえて、私たち札幌の者は本郷新の心をくみあげていきたい。

顔見せぬ仰臥像くろく砂丘に建つ

吹き止まぬ湾の風に守られ

五指ひらき人呼ぶ如き空間に

とどまらずして濱風の吹く

はまなすの花をその手に献花せむ

開きたる五指に緑青うかぶ

最近の作品制作の心境・近況

伴 翼 「北の彫刻展2004」出品作家

去年の12月、今年の7月と個展だけを重ねて発表しました。それによって、改めて自分の作品を見ることが出来ました。それからでしょうか、制作に対する考え方があつた增えてきたように思えます。

好きだから何となく、小さい頃から何かしら作ることが普通にあって、特にコレと言って劇的に感動したとか、変化があつたわけでもなく、作ることが制作という名前に変わっただけでした。

今までグループ展や展示は参加してきましたが、自分の作品というものは、なかなか見ないんです。自分が作ってきたからとか、形になる前から知っているからとか、頭の中では一から十まで知っている、などと自分の作品を作る者の立場だけで見ていました。決して客観視できているとか、出来ていないとかではなく、一ファンとして自分の作品を見れるか、肯定しながら作品を作れるかということが、やっと見えてきました。

僕は、作ることがすぐ側にあったので、特に主観的な肯定が必要でした。自分にとって心を、世界を映してくれる鏡にもなるし時に重く苦しい塊にもなるのです。

自分の作品を見てみて、これも自分が見る世界なのかなと、やっと最近になって実感できるようになってきました。

今、展示している「北の彫刻展2004」では、2000年から現在までの具象彫刻での変化が見ることが出来ます。これまで、具象性が強いものも、抽象性が強いものも両極とも作ってきました。具象形態であっても、サイズや部分であったり、色であったりと抽象形態として、抽象彫刻として機能するかもしれないし、抽象彫刻も作品の意図とは別に錯覚してしまえば、具象性を帯びたものに見えてくるはずですそんな思いで制作してきました。

この展示を通じ、自分らしい彫刻のスタイルを見ていただければと思います。

渡辺行夫先生のアトリエ訪問雑感

森 茂樹 会員

一昨年から4回ほど、彫刻家の工房を拝見させて頂きました。私は工科系の人間ですので、この彫刻像を創るには、どのような道具・工具を使用してつくるのかが最大の関心事です。

制作者の作業現場は木工場であったり、鉄工場であったり、旋盤・溶接機材、その他各種の工具等さまざまです。

先生の作品は貴重な資材である大理石を切断したり、組み合わせたり、グラインダーで曲面加工等、失敗のゆるされぬ難関・局面を突破して、完成されていくのがよくわかります。そして数々の苦難を乗り越え、芸術作品が生まれていくでしょう。

創像という字は、創造と想像の融合した形だと思います。先生はこの世界で30有余年、これからも素晴らしい創像作品・円熟味のある作品を発表されることを期待しております。

なお、付け加えさせて頂けるならば、敷地を利用した子供達への工房教室の開催などは如何でしょうか。



(写真上は前庭、下は屋内の作品)



生涯学習と博物館ボランティアについて(Ⅲ)

高橋淑子 会員

最終回は私なりに生涯学習と博物館ボランティアについて考察します。

1 博物館ボランティアとは？

このシリーズのテーマとしたように博物館ボランティアと生涯学習は切っても切れない縁があります。博物館ボランティアが一般的な福祉ボランティアと違うといわれるなら、この部分が大きいわけで、奉仕するという気持ちはもちろんあるものの自分自身が何かを学びたいという気持ちで博物館にかかわっていけるボランティアを選択した人が多いのではないかでしょうか。この傾向がともすれば、ボランティアの姿勢に特権意識をもたらし、学びたいばかりの受益者集団となってしまうことにつながります。ボランティアは常に学ぶ意欲を持つつ、その学んだことを多くの人に、ボランティアでしか出来ない方法で還元することを目的とするべきであると思います。また、それを受け入れる博物館はそういうボランティアの欲求を満たしつつ、専門知識を持って指導し、上手に地域のために活用するというのが理想でしょう。

私自身も近代美術館でのボランティアを始めるときに先輩から『月謝がかからないカルチュアスクールに通っていると思えば、交通費などが持ち出しになったとしても安いものでしょ』と言われて納得したこともあります、続けていくうちに自分自身が学習すると言う直接的な利益よりそれを広く地域に伝えるということに喜びが見出せるようになり、ボランティアだからこそ得るものがあると言うことに気付きました。

2 札幌彫刻美術館とボランティア

札幌彫刻美術館では現在、組織的なボランティアを持っていませんが、120名の会員が所属する友の会が存在しています。私が友の会に抱いていたイメージは宮の森という住宅街のこじんまりとした美術館にわいわいと集い、美術館のファンとして美術館を盛り立てていこうとするものでした。ただ、本郷新という人を知り、札幌彫刻美術館の札幌市に果たす役割と言うものを考えると、友の会はさらに広く札幌市民に美術館をアピールする団体として大きな意味でのボランティア活動をしていかなくてはと考えるようになりました。

一方で、友の会の会員は美術館のサポーターであると同時に市民の代表でもあるわけですから、札幌彫刻美術館としても是非、会員の学習意欲を満たし、市民としての率直な意見にも、耳を傾けて、美術と言う専門分野だけでは抱えきれない今後の美術館活動に大いに役立て、利用して頂きたいと切に願います。

堅苦しく博物館ボランティアを考えなくても、札幌彫刻美術館のことを考える友の会の会員一人一人が自分に何ができるのかと思いかえす一助になればとこのシリーズを締めくくります。

野外彫刻とアートツーリズム

大内 東 観光情報学会会長

はじめに

札幌彫刻美術館友の会と皆さん、こんには。皆さんの日ごろの活発な活動に敬意を表します。このたび橋本会長さんから機会を頂き、皆さんの活動と関連する筆者の活動についてご紹介させていただくことになりました。よろしくお願ひいたします。

1. 観光情報学会

観光情報学会は情報技術活用による産官連携の力を結集した観光振興による地域の活性化、新しい学問領域の創出、この分野の人材育成を目的として、平成15年9月に設立されました。日本全国の産官学のあらゆる観光に関わる人々の参加を得ながら、地域XあるいはテーマXによるX-観光情報学研究会を立ち上げ、その共同体として観光情報学会の組織運営を行っています。現在は、全国7つの研究会が活動を行っています。それらの活動成果は年一開催される全国大会において発表し、成果を競うとともに互いの情報交換と懇親を行っています。札幌では、さっぽろー観光情報学研究会（略称「さっぽろ観研」）と北大学生観光情報学研究会が活動を行っています。

2. アートツーリズム研究プロジェクト

さっぽろ観研では、平成16年度の研究プロジェクトとして、アートツーリズム研究プロジェクトを立ち上げました。

本プロジェクトの活動は、以下の3点に集約されます。

第1に、アートツーリズムに関する情報収集と基礎研究を行います。そもそもアート

ツーリズムとは何でしょう？アートツーリズムにおけるIT活用方法は？等を先駆的事例調査と具体的な実例を取り上げて研究します。

第2に、アートツーリズムの実例として野外彫刻を取り上げ、IT活用の具体的な活動を行います。すでにさっぽろ観研では、札幌彫刻美術館友の会と共同して北海道における野外彫刻のデータベース・システムを開発しています。これは作家、設置者、制作年、材質、特徴、エピソードなど、野外彫刻の基本台帳としてのデータを整備し、さらにGISと一体化して野外彫刻ツアーを可能にする様々な機能を含む、アートツーリズム支援システムを目指すものです。

第3に、アートツーリズムを札幌から発信する試みを実施します。北海道観光のオフシーズンとなる11月にアート、ファッション、グルメなど人間の感性に訴える観光資源を基に、新たなツーリズムの企画開発を試みます。

3. 野外彫刻アートツーリズムに関する企画

2004年はイサム・ノグチ生誕100周年に当たっており、2005年はモエレ沼公園のイサム・ノグチ作品のグランド・オープン、さらにこの年は本郷新の生誕100周年も迎えます。さっぽろ観研では、アートツーリズムの企画としてこの機会を捉え、イサム・ノグチのモエレ・ファン・クラブと本郷新の札幌彫刻美術館友の会の協力を得て、2年間にわたる両彫刻家の記念企画を立ち上げ、全国に野外彫刻によるアートツーリズムを発信する企画を行います。

その第1弾として本年11月中旬に「ア-

トで高まる街のブランド力とその発信』のタイトルで『イサム・ノグチ生誕 100 周年記念シンポジューム』の開催を準備しています。現在の主な企画内容は、以下の内容を検討しています。

日時：11月初旬予定

場所：モエレ沼ガラスのピラミッド予定

プログラム：

1. 基調講演
2. パネルディスカッション『アートと観光のインテグレーション』

詳細が決まりましたら、お知らせします。

4. おわりに

11月のシンポジウムに向けてほぼ毎週、実行委員会を開催しています。友の会からも橋本会長はじめ会員の方々が委員として参加されています。計画の様子は橋本会長や参加者からお聞きください。そして11月にはぜひシンポジウムにご参加ください。お待ちしています。

さらに、来年度は本郷新生誕 100 周年に向けてのシンポジウムも企画しています。この企画には友の会の皆さんのご協力が不可欠です。

(北海道大学大学院教授：工学研究科システム情報工学専攻. 複雑系工学講座調和系工学分野)

学会入会に関するお問い合わせ

学会へ入会を希望される方は、事務局幹事へご連絡ください。入会についてご案内いたします。あるいは次の学会ホームページをご覧ください。

〒060-8628

札幌市北区北 13 条西 8 丁目

北海道大学大学院 工学研究科

システム情報工学専攻 複雑系工学講座 調和系工学分野内

観光情報学会事務局 事務局長 川村 秀憲

E-mail:

kawamura@complex.eng.hokudai.ac.jp

TEL: 011-706-6499, FAX: 011-706-7834

学会ホームページ: www.sti-jpn.org

11月の行事予定案内

さっぽろ一観光情報学研究会

野外彫刻による

アートツーリズム研究プロジェクト

第1回プログラム

イサム・ノグチ生誕 100 周年

記念シンポジューム

基調講演

黒川雅之氏など (交渉中)

(プロダクトデザイナー／建築家)

パネルディスカッション

「アートと観光のインテグレーション」

コーデネーター：大内 東

パネリスト： (調整中)

日時：平成 16 年 11 月 5 日 (金)

(時間：調整中)

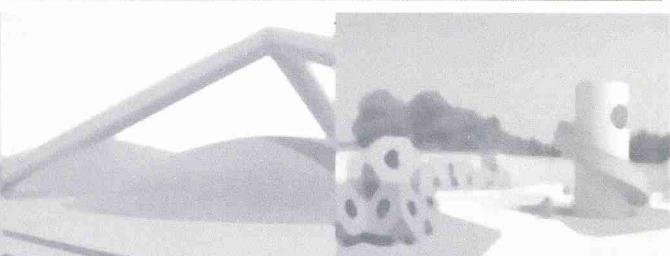
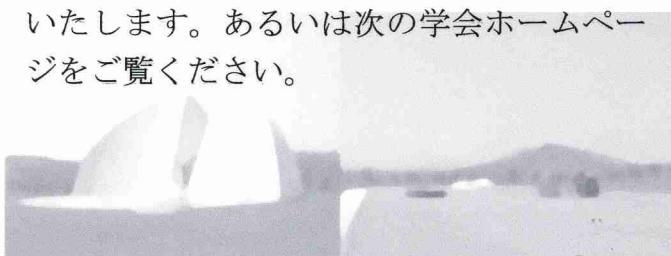
会場：モエレ沼公園「ガラスのピラミッド」

主催：さっぽろ一観光情報学会

アートツーリズム研究プロジェクト

(10月上旬に開催日時、基調講演者、

パネリストなどが確定する予定)



旅海の日「知恵と汗と心」

40数年続いている昭和新山の火祭りを、6度目の今年も感動して見て参りました。毎年、基本パターンが變っても数万人の人々が何度も見に来るのは、ただ美しく素晴らしいからだけでなく、そこに協力している人々の「今年はこうして・・」という『知恵と汗と心』の結晶が、人々に「都合つけてでも観に行こう」という気にさせているのでないでしょうか？

その時、私は同時に、以前観に行っていた彫刻美術館を思い出しました。年々、館全体に気力が薄らいでいるように思え、観に行く度に「また行こう」という気にしばらくならない自分に、何故だろう・・と淋しささえ覚えたものです。

館長さんは任期の間、芸術家のたましいを觀せるべく「知恵と汗と心」に計り知れない苦心をされているはずです。そして、学芸員さんも初心忘れずに余すことなく力を発揮し、経験を活かして様々な努力をなされていることでしょう。また他の職員も、日々館の内外で、地元は勿論、多くの来訪者に、行き届いた配慮をなさっているはずなのに・・と思います。

そんなことを考えたら、以前の館の空気の冷たさが思い出され、この感じは多分私だけのものなのだろうと自問自答しながら、ふと、久しく訪れていないことも思い出して自分に苦笑している有様です。

今は館の空気がどのように動いているのか、幾度となく訪れていた頃の自分の気持ちを見届けたり、きっと火祭りのように「知恵と汗と心」の美術館になっていると信じ、年金を貯め、今度は館長さんはじめ協力者の方々の努力に感謝感激して心癒され、また行きたくなるようになるのを楽しみにしているところです。

ギャラリーシリーズ⑥

原 典夫会員

「ギャラリー どらーる」を訪れて

このギャラリーは道立近代美術館に程近い中央区北4条西十七丁目にある HOTEL D'ORALの1階にある。ホテルのフロントや喫茶コーナーに続く東側の一角で、ギャラリー専用の出入り口もある。

株式会社ドーラル（建築資材卸の道内大手）が、平成6年にこの地に本社ビル（7階建て）を建て、この中にビジネスホテルも開業したが、平成9年このビルの1階に「ギャラリードラーリー」を開設した。開設当初から一貫して、主に道内に在住して活躍している作家に個展の場を提供するという企画展として運営されている。即ち、毎年、1作家1ヶ月、年間10人程の作家の個展である。作家の選定に当たっては、昨年からは美術評論家の吉田豪介氏（小樽市立美術館館長）の協力を得ているという。

今年の個展作家は次のとおり

1月、2月 今年個展をする10名の作家の合同展

3月	柿崎 熙	立体抽象	無所属	(石狩)	
4月	高橋三加子	油彩具象	全道展	会員(旭川)	
5月	林 亨	油彩抽象	無所属	(札幌)	
6月	真柄修一	油彩具象	道展	会員(滝川)	
7月	木嶋良治	〃	〃	(札幌)	
8月	村上陽一	〃	〃	(帯広)	
9月	川畑盛邦	〃	〃	(札幌)	
10月	富田知子	〃	〃	全道展	会員(札幌)
11月	小島和夫	日本画	具象院展	特待(札幌)	
12月	阿部典英	立体抽象	無所属	(札幌)	

6月の真柄修一展と7月の木嶋良治展をみたが、いずれも100号の大作数点を中心にサムホールから100号までの20点余の作品が展示されていたが、ベテランの迫力のある絵画を鑑賞するのに、きわめて良好な展示空間をもったギャラリーと云えよう。(年中無休)

(所在. 中央区北4西17

Tel. 011-622-2211)

本館

ひと かたち

～躍動する人体の魅力～

10月16日（土）～3月21日（日）

記念館

素描展 パート 3

～本郷の未公開素描～

10月16日（土）～3月21日（日）

札幌彫刻美術館
平成16年度
本郷新
後期収蔵品展



10月～12月期

子ども造型教室（小学校低学年対象）

第1回 10月16日(土) 10:00～12:30

第2回 11月 6日(土) 10:00～12:30

本館研修室 各定員36名 参加料1人 1,000円

宮の森散策と美術館鑑賞の会

ステージ 5 『三角山と大倉山の縦走』

10月23日（土） 9:15～12:30

定員50名 高校生以上500円、小中生100円

「文化の日」市民無料開放と美術館コンサート「三十弦の世界」

11月3日（水）「文化の日」 10:00～15:00

コンサート 15:00～16:00 「本館」

お楽しみ抽選会を予定

クリスマス コンサート（内容未定）本館1階ホール

12月23日（木） 18:00～19:00

一般 300円、高大生200円、中小生無料

有の会便り はがき通信

拝復 いつも通信を頂き、また年度

初めには優待券もご送付頂いて有難う存じました。

さらにこの度は「いずみ第8号をお送り頂き、まことに有難う存じます。

毎号とても面白く読ませて頂いておりますが、第8号は特に記事も豊富な上、編集の方々の熱気が溢れるようで感動しております。

いろいろな行事の中でも「アトリエ訪問」は最も魅力的で、一方、計画から実行まで担当の方のご苦心が十分拝察できるのですが、私は不参加

永井様子 会員

のお返事ばかりで申し訳ございません。特に今回は当日の成果をお伺いしたいものと考えております。「いずみ8号」に早速渡辺先生のアトリエと本郷新の旧アトリエの写真入のご報告の記事があり、非常にご盛会だったとのことで何よりと存じました。

近年の役員の皆様のご活動には心から敬意を表します。今後ともどうぞよろしく、まずは御礼まで。

敬具

友の会便り

イサム・ノグチ生誕100周年記念 講演会に出席して 副会長 斎藤美年子

7月23日、「モエレ・ファン・クラブ」の主催による世田谷美術館館長酒井忠康氏（余市町出身）による「イサム・ノグチ、詩人、彫刻家」と題した特別講演会および「モエレ沼公園について」の座談会が中島公園の豊平館（重要文化財）において開催された。

酒井館長はイサム・ノグチ（1904～1988）は生まれながらの彫刻家で、詩人でもあったとして詳しく話された。

この後でモエレ沼のグランド・オープニングに関連した三者会談が、司会：林美香子氏と出席者：酒井忠康氏、橋本信夫氏（札幌彫刻美術館友の会会長）、平田匡広氏（元札幌市環境局局長）によって行われた。

最初はモエレ沼を見てのそれぞれの感想、次に酒井氏が札幌大通公園8丁目のブラック・スライド・マントラ（螺旋型黒御影石の滑り台）に触れ、「100年後に子供たちのお尻によって型作られていくだろう」というイサムの話を紹介された。

橋本会長はニューヨーク滞在中の家族とイサム・ノグチとの交流の思い出を語り、次に平田氏が40年前から始まったモエレ沼緑化推進事業やイサム・ノグチによるモエレ沼公園のマスタープラン策定などについての思い出を話された。189ヘクタールの広大なこの公園は15年計画で、平成16年度に完成予定である。

最後にこれからモエレ沼に期待することとして、酒井氏が芸術の森とモエレ沼がドッキングするのが効果的であろうと話されたのに対して、橋本会長は札幌彫刻美術館もぜひ仲間入りさせて頂きたいと話され、会場から拍手が湧き、盛会裡に終了した。

展覧会案内

「丸山隆 彫刻展」

日時：2004年10月17日〔日〕～
12月5日〔日〕

場所：札幌芸術の森美術館

略歴：穂山美術館のある長野県穂高町出身
東京藝術大学卒
北海道教育大学助教授〔彫刻〕
平成14年逝去

1985年の北海道教育大学赴任以来の18年間に制作された石彫や金属作品約60点を展示

（故丸山隆先生には彫刻鑑賞や講演会、特に故郷の穂山美術館のことなどで大変お世話になりました。出来るだけ多くの会員が先生の作品をご覧になられますように！）

札幌彫刻美術館のホームページ

<http://sapporo-chokoku.jp>

編集後記

来春の完成を目指して本郷新生誕百周年の記念事業、札幌市視聴覚教材ビデオ「本郷新的野外彫刻とその魅力」の制作に着手しました。

高校野球、オリンピックに興奮した夏が終わり芸術鑑賞の秋がきました。

目も心も開いて外へ出かけましょう。

（原 寿子）

彫刻美術館友の会 会報「いづみ」No.9
財団法人札幌彫刻美術館内 編集責任者濱久子
〒064-0954

札幌市中央区宮の森4条12丁目

電話とファックス：011-642-5709

平成16年10月1日発行

編集委員の連絡先：電話とファックス

斎藤美年子：011-643-7246

濱 久子：011-893-5212